卒業メニュー (3)

美貴が後悔をにじませた声で言った。

「ねえ、この前は、転校したら連絡がなくなるのもしょうがないなんて言ったけど、わたしはまともに友達とお別れもできなかったし、転校の事情も特殊だったから、みんながみんな①わたしみたいになるわけじゃないわ。少なくともわたしは、梢が転校してもずっと……」

「いいよ、無理しなくって」

あたしは無意識に美貴の言葉を遮っていた。

あれ、あたし、なんでこんなことを言ってるんだろう。ここは美貴のやさしさに感謝しなくちゃいけないところなのに。

そんなふうに戸惑いながらも、あたしはさばさばした口調でさらに続けていた。

「やっぱさ、美貴が言ったとおり、しょうがないと思うんだよね。会えなくなったら友情が消えちゃうのも。だから美貴も無理しないで、あたしのことはきれいさっぱり忘れちゃって。あたしもあっちで新しい友達をつくって、楽しくやるからさ」

笑顔で美貴に告げながら、あたしは胸の痛みに耐えていた。

②そうだ、あたしは怖いんだ。美貴の言葉を信じて裏切られるのが。大事な絆がだんだんほどけていってしまうのが。いつか失われてしまうつながりなら、いっそすっぱり断ち切ってしまったほうが、きっとつらくない。

③美貴が悲しげに目を細めてあたしを見つめた。

「梢……」

「ごめん、いま夕飯の支度をしてるとこでさ。転校のことは、桃たちにもちゃんと話すから。じゃあ、また明日学校でね」

強引に会話を終わらせて、あたしは家の中に引っこんだ。

玄関を閉めると、あたしはドアに背中を預けて息をひそめた。二分くらい経ってから、ようやく美貴がうちの前を立ち去ったのがわかった。

あたしはそのあとも、しばらく玄関から動けないでいた。

（如月かずさ『給食アンサンブル』光村図書出版 所収「卒業メニュー」による）

確認テスト 本文を読んで、問いに答えなさい。

(1) ――線①「わたしみたいになる」とはどうなることを指しているか。適当なものを選びなさい。

ア 転校した後で、前の学校の友達と連絡もとらないようになってしまうこと。

イ 友達にきちんとしたお別れを伝えることができないまま転校してしまうこと。

ウ 相手の事情も考えずに、転校したら連絡はなくなるものだと発言してしまうこと。

〔　　〕

(2) ――線②「そうだ、あたしは怖いんだ」とあるが、「あたし」は何が怖いのか。適当なものを選びなさい。

ア 無理な言い訳を信じて、美貴の言葉が本心からのものではないことを後で思い知らされること。

イ 前の学校の友達との友情が消えてしまった後も、新しい学校で友達をつくることができないこと。

ウ 友達であり続けるというような美貴の言葉を信じ続けていても、友情がいつかは失われてしまうこと。

〔　　〕

(3) ――線③「美貴が悲しげに目を細めてあたしを見つめた」とあるが、美貴は何を悲しんでいるのか。適当なものを選びなさい。

ア 「あたし」が美貴の言葉を遮って、美貴のやさしさに感謝もせずに話をしたこと。

イ 「あたし」が、会えなくなれば友情は消えてしまうものだから、自分のことを忘れてもよいと言ったこと。

ウ 「あたし」が夕飯の支度のために転校の話を終わらせ、美貴に対して無愛想な態度を取ったこと。

〔　　〕